

第8回フィロロギカ研究集会

2009年10月17日

於：東京大学本郷キャンパス 文学部1号大教室

11:00～12:00

『アフロディテ讃歌』の新しい校訂・注釈本の紹介

泰田伊知朗(台湾・義守大学)

<休憩>

14:00～15:00

Nekyia におけるミーノース

—ヘーラクレス場面(*Od.* 11. 565-627)をめぐる問題について—

佐野好則 (国際基督教大学)

15:00～16:00

近代日本におけるプラトン『国家』の受容 —文献誌・思想史的考察—

納富信留 (慶應義塾大学)

<会計報告ほか>

16:30～17:30

我々 (フィロロギカ) が存在し活動している意義について

安西真 (北海道大学)

*研究会終了後、18:00より懇親会を予定しております。

会場：「ピアンタ本郷」 (03-5804-0255)

会費は5,000円程度。当日の申込みを歓迎いたします。

<発表要旨>

『アフロディテ讃歌』の新しい校訂・注釈本の紹介

泰田伊知朗

本発表では、『ホメロス讃歌』の一つ『アフロディテ讃歌』の新しい校訂・注釈本について紹介する：A. Faulkner, *The Homeric Hymn to Aphrodite: Introduction, Text, and Commentary*. Pp. xv + 342, Oxford UP 2008. 『ホメロス讃歌』が1488年に初めて印刷されて以来、初の『アフロディテ讃歌』のみを対象とした本格的な校訂・注釈本である。本書の序文では讃歌の要約、他の作品との関係、作成時期と場所などが詳述される。テキストでは、新しい読みが三箇所提案される：51 $\upsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$ (従来 $\upsilon\iota\epsilon\acute{\iota}\varsigma$) , 207 $\epsilon\acute{\iota}\delta\eta$ (従来 $\eta\delta\epsilon\iota$) , 267 $\tau\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\epsilon\alpha$ (従来 $\tau\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\eta$)。注釈では、各語彙や各場面および他の作品との共通点などが詳細に解説される。

本書は非常に充実した内容であるが、賛同しかねる点もある。Faulkner氏がテキストと注釈を作成するに当たって前提とする事柄のうち、以下の二つに関して異論を唱えたい。第一の前提は、この作品は7世紀後半の作品で、アイオリス起源であり、アッティカ方言の形はこの讃歌に認められない、ということ。第二の前提は、文法や語彙に関して詩人の誤りはない、ということである。

第一の前提で氏はアッティカ方言の語彙を詩人のものとは認めないので、写本に残されているアッティカ方言の語彙を、Faulkner氏は写字生の修正とし、この讃歌にふさわしいと氏が判断するイオニア方言の形に変更する：e.g. 51 写本 $\upsilon\iota\epsilon\acute{\iota}\varsigma$ 、Faulkner $\upsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$: 72 写 $\eta\epsilon\sigma\alpha\nu$, F. $\eta\acute{\iota}\sigma\alpha\nu$: 98 写 $\nu\mu\phi\acute{\omega}\nu$, F. $\nu\mu\phi\acute{\epsilon}\omega\nu$: 125 写 $\acute{\epsilon}\delta\acute{\omicron}\kappa\omicron\nu\nu$, F. $\delta\acute{\omicron}\kappa\epsilon\omicron\nu$: 267 写 $\tau\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\eta$, F. $\tau\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\epsilon\alpha$, 284 写 $\acute{\epsilon}\gamma\gamma\omicron\nu\nu$, F. $\acute{\epsilon}\kappa\gamma\omicron\nu\nu$. しかし氏の述べる作成年代と場所の根拠は決して強固なものではない。さらに氏は上記の修正を写字生が行ったとするが、『ホメロス讃歌』の写本において同様の修正はほとんど見られない。従って、氏が想像する形でのイオニア方言からアッティカ方言への修正を、『ホメロス讃歌』の歴代の写字生は行ってこなかった。以上のことから、写本のアッティカ方言の語彙が写字生の修正ではなく詩人の読みである可能性を否定する理由はないと言える。また第二の前提をも

とに、Faulkner氏は詩人の誤りを指摘した先行研究を否定する。だが、この讃歌の中には人称の不一致や、不自然な語彙、文法上の問題がしばしば見られ、詩人の誤りはないと断定することは難しい。

Faulkner氏は、7世紀後半の卓越したアイオリス出身の口承詩人がこの讃歌を作成したという前提がまずありきで、この本を書いている。だがその不確かな前提をもとに、写本の情報を変更したり、注釈を作成することには賛同しかねる。

以上の点を中心に本書の紹介を行いたい。

Nekyia におけるミーノース

—ヘーラクレス場面(*Od.* 11. 565-627)をめぐる問題について—

佐野好則

『オデュッセイア』第11巻の冥界の描写の最後に位置するミーノースからヘーラクレスにいたる6人の人物の場面については、古代のホメーロス批評以来様々な難点が指摘されてきた。特に、亡霊が冥界の入口に留まるオデュッセウスを訪れるという死者予言 *nekyomanteia* に通じる設定との齟齬は現代の研究者の間でも注目され、この場面は冥界降り *katabasis* を題材とする他の叙事詩からの借用とみなす見解が有力である。本発表においては、この場面に対する様々な難点の指摘を踏まえて、*nekyomanteia* 的な形式の中に *katabasis* の題材を盛り込むことを可能にするための工夫という観点から、この場面の構成および措辞を検討することを試みたい。

近代日本におけるプラトン『国家』の受容

—文献誌・思想史的考察—

納富信留

プラトンの対話篇Politeiaは、現在では日本でも欧米でも西洋哲学の古典として最重視されている。他方で、この著作は20世紀の欧米では全体主義の起源として痛烈に批判されてきた（佐々木毅『プラトンの呪縛』参照）。19世紀半ばから西洋古典を受容してきた日本でこの著作がどう受け入れられ、どのような思想的影響をもってきたのか。この主題はこれまでまったく顧みられてこなかった。明治以来の翻訳、研究書・論文、そして言及を調査し、そこに確認される諸特徴から日本におけるプラトン哲学の意義を考察したい。

戦前には複数の翻訳がでていたが、それらはギリシア語原典に基づく学術成果ではなかった。他方で、政治思想や教育学を中心に、この著作は「共和国」「理想国」と呼ばれて一般に大きな関心を呼んでいた。それは、（1）社会主義・共産主義の起源、（2）ユートピア思想の原型、（3）民主主義に対抗する哲人政治思想、（4）理想の哲人政治家の教育論、そして（5）個人よりも社会の全体性を優先する国家主義の政治理論、として多面的に論じられていた。それらの側面は複雑に交錯しながら、戦前の国家主義にも関わっていたように見える。だが、戦後に再びプラトンが注目され、より本格的な翻訳や研究が次々と出る中で、戦前のそのような側面は顧みられなかった。欧米で展開されたプラトン批判は、根拠のない言いがかりとして無視されたのである。

本報告では、このような流れを現時点で調査しえた文献リスト・資料から検討していく。今回は、主に戦前・戦中の受容に焦点を当てたい。文献学というより、受容史・文献誌（bibliography）の研究主題ではあるが、フィロロギカの方々のご教示を請いたい。とりわけ年配の方々には、ご自身の経験もお聞きできればと希望している。

我々（フィロロギカ）が存在している意義について

安西眞

2002年に、日本西洋古典学会の指名にもとづいて、広島大学で「古典学的に読むこと」という名のパネル発表をしました。これは翌年の学会誌に載りましたから、読んだことがあるひとがいるかもしれません。ここでお話するのはその続きだと言えますが、まったく違う要素もあります。なぜ違うか？それは、既に「フィロロギカ」という研究会が存在し、機関雑誌もまあ、軌道に乗った状態であり、私は、その「運動」を推進してきた側のひとりだったからです。つまり、2002年の時点では、本文批判をも視野に入れた読み方を我々も進めるべきである、という主張は、古典文献を読むことを職業とするひとりの日本の学徒の個人的な見解にしかすぎませんでした。今日では、基本的には同じ主張をするにしても、その主張は、我々の会からの、いくらか公式的な要素もないではない自己主張ということにもなりかねないからです。

そういう位置から、日本人が「フィロロギカ」を続けるほどの覚悟で、欧州の古典を、単に彼らが作り上げてきたテキスト群と、かれらが良しとしてきた基本的な読み方とは当然違ったものにならざるをえない角度から深く読もうとすることには、大きな意味がある、と主張したい。

その、「違った角度」の実例、となるかどうか分かりませんが、『イリアス』第18巻のアキレウスの楯の描写へのこれまでの理解と、恐らく欧州的帰属意識を逃れた者からはこう見えるのではないか、という私の理解に向けての提案を試みたいと思います。これまでいくつかの『イリアス』もので、欧州的帰属意識が、『イリアス』というもともと二項対立的にできている作品を、まさにその対立二項が何かということを読む、洞察する場所で、読む人間たちを誤らせてきた、という主張を私はかすかながらして来ましたが、その作業をここでも続け、その主張を重ねたい、と思います。